
おれたちバーチャルボーイズ！

法螺 吹介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おれたちバー・チャルボーアイズ！

【NZコード】

N8129Y

【作者名】

法螺 吹介

【あらすじ】

『赤い光を見てから記憶がない』と証言する通り魔事件容疑者のニユースを見たジツオ少年は、とんでも行動を繰り返す愉快な小学六年生！ 天真爛漫な同級生の友達イーコに小馬鹿にされたり、頭脳明晰なシユタインに説教されたりするお茶目さんだ。

放課後ゲームセンターから意氣揚々と帰宅すると、見知らぬ叔父さんチュウタ氏がお客さんとして来ていた。ジツオはチュウタ氏の誘いが断れず、彼持参のテレビゲームをする。しかしそのゲーム機は常識では考えられないクレイジーなシロモノだった！

ゲーム機の秘密、叔父さんの正体……謎が謎を呼ぶ展開に翻弄されるジッオの運命やいかに！

赤い光に用心

（……続いての二コースです。仮想県仮定市で男が刃物を持つて暴れるという二コースが入っています。目撃者に拵りますと、男は突然奇声をあげ、鞄に忍ばせていたナイフを持って周囲を威嚇、通行人を切りつけようと暴れましたが、通りがかつた無職の男によつて取り押さえられ、その後通報によつて駆けつけた警官が傷害未遂の疑いで逮捕したとのことです。容疑者は『突然赤い光が見えて、気がついたら取り押さえられていた』と話している模様です。この事件により容疑者を取り押さえた無職の男が、容疑者に切りつけられ軽傷を負っています……）

「赤い光赤い光……馬鹿は高いところが好き、狂人は赤い光が好きつてね。それにどうよ？ せつかく取り押さえて怪我までして、無職無職つてそりやないよ。そりや無職なんだろうけどね、そつとしといてやろうよ」

「ジツオ！ なにテレビと話してるので、あなた学校行かないとだめな時間じゃない？ そんなだとあなたが無職になるわよ」とジツオの母はシステムキッチンの向こう側から言った。

「大丈夫、こちとら伊達に六年まで登りつめたわけじゃないよ。登校にかかる時間も心得てる」と日源実男ことジツオは言った。

ジツオの母はジツオのトーストが一枚まるまる残つているのを見て「まだ食べてないの？ 早く食べなさい」と言った。

ジツオはなにも理由もなくトーストを食べ残しているわけじゃない。トーストをくわえて角を曲がれば、美人でおてんばな転校生とぶつかる確率があがると思ったからだ。もちろん本心から信じているわけではないが、始業式の今日は絶好のチャンス。ジツオはなにごとも試してみなければ気がすまないタイプなのだ。

しかしジツオは空気も読む。ランドセルを拾い上げ、「じゃ、行

つてきます」と黙つてからトーストをくわえ、学校へ向かつた。

始業式前のホームルームが終わつてから「ジッオ、おひや。学校来るときパン食べてたでしょ?」ときいたのはジッオの同級生、吉田良子ヨシダヨシコで彼女のあだ名はイー「口」だつた。

「食べてたよ、それがどうかしたかい?」

「なんで?」

「理由なんかない、そんなこと忘れてくれ」

「転校生とぶつかりたかったんでしょ?」

「……へー、おもしろいね。それいだいだ。転校生とぶつかりた

かつた、柵の向こう側の女子と知り合いたかったんだ」
「はあ? 意味わかんない、変なやつ」と黙つてイー「はジッオに軽蔑した眼差しを向けたあと、「ミキちゃんそれでさー」と甲高い声を出してミキちゃんのもとへ戻つていつた。

ジッオはたつた一人の友達といつて過言ではない相原秀太アイハラシユウタことシユタイン 五年のとき学級委員長をしていて秀太委員長、それにアインシユタインをもじつてついたあだ名 のところにいつた。

「シユタイン、ひさしぶ。なんか変わつたことあつた?」

「おお、ジッオ。なんもないよ。いつもと同じ。塾ばつかだね」

「大変だねー、中学受験だつけ? 『苦労なこつて』

「おまえは受けないの?」

「おれは受けける気ないね」

「受けとけばあとはエスカレーター式で楽できるのに」

「人生山あり谷あり、樂することばかり考えていてはいかんのだよ」

「そりや そうだよ。だからわ、いま頑張るかあとで頑張るかつて話だろ。それにわ、たぶん人生つてずっと頑張りっぱなしだぜ、できるやつはな」とシユタインは瞳をきらつかせながら黙つた。

「うん、そうだね。シユタイン、きみは正しいよ。でも、今日学校終わつたら遊びにいかない?」

「おう、いいよ。なにすんの?」

「どうあえずゲームにでもいこうぜ」

FFOキヤツチャ一、プリクラ、テレビゲーム、エアホッケー、パンチングマシーン、パチンコ、スロットなど。

いろいろな人がゲームで遊んでいる。お年寄り、おじさん、おばさんも。「子どもにはゲームするなって言うくせに自分たちはするんだな、これ。そもそもゲームって子どものものなんじゃないの?」とジツオは言った。

「大人も大して変わんないってことだね」

ジツオとショタインは口が暮れるまでゲームセンターで遊んで、家に帰つた。

「ただいま」と言つてジツオが帰宅すると、玄関に見慣れない靴がある。誰が来ているのか知らないけどなるべく関わりたくないな、でも挨拶ぐらいはしないとあとで父か母、もしくは両方に文句を言われるかもと思ったので、ランドセルを部屋に放り投げてリビングに向かつた。

ソファにジツオの父と母、細いジツオの父みたいな人が座つていた。ジツオは「どうも」と細いほうに会釈した。その人は「ジツオくん、おかえり」と言つた。彼の足元に大きな飴色のトランクがあるのにジツオは気づいた。

ジツオの父は「おまえの叔父さんだよ。懐古忠太、チュウタおじさんだ」と説明した。

「おまえ遊んでもらつたことがあるんだぞ。憶えてるか? おまえはまだおしめをしていたがな、はつはつは……」

ジツオの母は「まあ、あなたいやだ、おほほほ」と言つた。

「はは、兄さんはいつもおもしろいこと言つね」

頃合をみて「どうも、遊んでもらつたようで、ありがとうござります」とジツオが真顔で言つと、笑つていたみんなが静まり返つた。「父親譲りだ」とチュウタ氏が言つと、ジツオの父と母はなにがそ

んなにおもしろかったのかわからないが、大笑いした。

「ジッオくん、ゲームでもしない？」とチュウタ氏はジッオを誘つた。

「叔父さん、なんのゲームをするんですか？」

「テレビゲームだよ」

大人になつてもまだテレビゲームか、おつさんとテレビゲームなんでしたくないけどつきてやつてやるが、ヒジッオは思つて「一応新しいやつ揃つてると思います」と言つた。

「持つてきたのがあるから、それで遊ぼう」と言つてチュウタ氏は飴色のトランクを一度叩いた。指に絆創膏が巻いてあるのに気づいた。重症だな、とジッオは思つた。

ジッオは自分の部屋にチュウタ氏を案内し、部屋に入るとなぜだかいつもと違うような心地がした。ドアがゆっくりと閉まる音を聞くと、いつもより静かな気がするなと思つた。

直後によくわからない力によつて世界が波打ち、ぐるぐると回転、目に見えていたものがきれいさつぱり消え去り、どこまでも続く真つ白な空間にジッオとチュウタ氏は取り残された。

ジッオが驚いて言葉を失つていると、チュウタ氏が「大丈夫。元の世界には絶対に戻れるから」と声をかけた。

「落ち着いて。……さあ、ゲームを始めよう」

チュウタ氏は飴色のトランクを地面に置き、開いた。なかには赤い双眼鏡と三脚、ゲームのコントローラーが一組あるようで、チュウタ氏はそれを組み上げ始めた。

ジッオは自分はなにかの間違いで死んでしまつたのかと思つたが、これはどちらかといえば、死んでいるというより夢を見ているといつほつが近い気がする、というより、夢のほうがいいな、と思つた。

仮に死んでいるとしても、この世界が続いていくとしたら、この世界なりに生きていかないと。ああ！ でもこんな真っ白な世界は退屈で死にそうだ！ 一度死んだ人間が一度死ぬことなど……。

「ジツオくん、聞いているかい？」

「え？」

「聞いてくれ。なにから話せばいいか、どう説明したらわかつてもらえるか自信はないけど、ぼくは真実のみを話す」

よりによつてよく知らない叔父さんだけはいるんだよな、ヒジツオは思つた。最悪。

「アズ・ユー・ライク」ヒジツオはつぶやいた。

「ジツオくん！」

チュウタ氏はジツオを引っぱたこうと手を振り上げたが、ジツオが身を仰け反らせて「はいはい、わかりましたよわかりました」と言つたので振り上げた手を下ろした。

「聞かせてくださいよ。ちょっととはおもしろい話してくださいよ」「ぼくには落語家になつた友達がいる」とチュウタ氏は言った。

「……『赤い光を見た』といつて暴れる人たちのことは知つてないかい？ まあ知らないとしてもそういう人たちがいるんだ。だいたい十年ほど前からそう供述する人たちが現れた。彼らには『赤い光』以外にも共通点がある。だいたいが男性だということ、歳は三十前後であること。そして、あるものを所有していること。そいつがなにだかわかるかい？」

そう言ってチュウタ氏は組み上げた二組の双眼鏡らしきもののほうへ目線を向けた。ジツオもそれを見たが、なにかわからなかつたので「いえ」と答えた。

「そいつはバーチャ……おつと、名前を出すのもばかれる。とにかく、そいつは業界最大手の会社が製作したというのに一年持たなかつたものなんだ。二十年ほど昔の話さ。どうしようもないクソギーで会社の黒歴史、輝かしい業績を残している会社の汚点 知っている人はみんなそう思つていてると考えていい。でもそれは、あく

まで表向きの話なんだ。実は、そいつはいわくつきだつたのね」

チユウタ氏は自らの話に満足して、一度うなずいた。

ジツオは叔父さんは心の病気なんだな、と思つた。

チユウタ氏は身振り手振りを交えて話を続けた。

「そのゲームの開発の基になつたのが、ある大国が開発した軍事演習訓練機だ。その訓練機は、スコープを覗き込むとまるでその場にいると錯覚するほどの3D映像が赤い光で表現されるというものだつた。軍隊に必要なのは勇敢な兵士だ。赤い光の仮想空間 そこで訓練されれば、死の恐れさえ克服した兵士を増産できる、と軍の上層部は考えた。ところがそつはならなかつた。その訓練機は死をも恐れない兵士を増産するどころか、使用した兵士のほとんどを骨抜きにした。一度使用すると寝食を忘れてゲーム おつと訓練に没頭するようになつたからだ。間違いに気づいた上層部はすぐにその訓練機を禁止したが時すでに遅し。もう体制を維持できるだけの兵士は残つていなかつた。体制の崩壊、そして情報の流出つてわけさ」

「へえ、興味深い話ですね」とジツオは優しさから言つた。

「まだ続きがある」とチユウタ氏が言つたので、ジツオは嫌な気持ちになつた。

「崩壊直前の情報資料に『訓練機に没頭した兵士に異変が現れた』というものがあつたんだ。……繋がつてこないかい？」

「赤い光を見たという犯罪者ですか？」ジツオは自分の叔父さんが取り憑かれている妄想の内容が理解でききたと思って、少し安心した。

「そう。一連の犯人はおそらく中毒症状が進行して、精神に異常をきたしていると考えられる」

「でもそれだと二ンテ……」

「よせ！ 死にたいのか！ その名前は使うな！」とチユウタ氏はすごい剣幕で怒鳴つた。

ジツオは妄想にどつぶりつかりきつた叔父さんを見て、やつぱり

安心できないなと思つた。

「ああ、すみません。では例の組織せじゅうせんの情報をへ。」

「歯世界中のほとんどのシニアを持つていたからね。金なり払えたはずや。こやとなれば髪の十管十、とこう手もある」

「なるほど」

レッシ・パー・クレイジー！

二

ジッオは気づいた。この荒唐無稽さはあるで夢のようではないか！ 本当に夢なのだ。夢を見ている最中にこれは夢だと認識するのは難しいという。いま初めて夢の認識ができた。とにかく夢ならば、いずれ覚める。叔父さんの茶番に付き合つて退屈しおぎをしてればいい、とジッオは結論づけた。

「なぜ叔父さんはそこまで知ってるんですか？」

「それは言えない。時期が来たら話す。でもいま話したことは真実なんだ、落語家になつた友達に誓つ。これでどうだい？」

「信じます」

「ありがとう。とにかく、ぼくは考えたんだ。ここまでわかつていて、行動に移せるのはぼくだけだ。正義を貫くべきだ。訓練機をこの世から一つ残らず消したらなければならない」とね

「え、行動つて？ 社会に訓練機という麻薬が蔓延していく、それを一掃したいというのはわかります。しかし重要なのは訓練機を供給する組織を見つけ出すことでは？」

「われわれは訓練機をプレイすることにより黒幕に近づいていく」

「それで黒幕に近づけると？」

「論より証拠、実際にみてみればわかる」

「でもそれだとぼくらも中毒になつてしまつのでは？」

「それは大丈夫。ぼくらのゲームは毒抜きをしているからね。安心は保証する」

それを聞いたジッオは、毒抜きつて……あつ、まあ夢だからどうでもいいんだ、と思つた。

「どんな内容のゲ……訓練をするんですか？」

「もういいよ、もうゲームで構わないよ、実際ゲームだし。それで訓練内容は毎回変わるが、今回は飛行訓練シミュレーションだ。口

ックピット視点のシミューティングと考えていよい」

「操作は一般的なゲームとほとんど同じと思っていいんですか？」

「左手の十字キーで動かして右手のAとBボタンが攻撃とか」

「ボタンは飾りだ。コントローラーを握って、ただ念じればいい」

「それってすごくないですか？」

「訓練機はすごいんだ。訓練機の秘密はまだある。いまのきみには必要ないし、混乱させるだけだと思うから時期が来るまで話せないけど……。とにかくゲームを始めよう」

ジツオとチュウタ氏はそれぞれ訓練機の前に座った。しかし訓練機の構造的に使いやすいポジションというのが難しい。寝ても座つてもどんな体勢でもスコープを安定して覗き込むことはできない。「スイッチを入れれば解決さ」

ジツオは訓練機を手に持つて、動きそつなとつかかりを適当に動かしてみたが反応がない。そもそも電源がないのに点くわけない。「うつひょー、とかあわわわ……」って全力で奇声をあげてテンションを高めたあと、レツツ・ゴー・クレイジーといい発音で叫ぶとゲームのスイッチが入るんだ

「本気ですか？」

「習つより慣れろつてね。見本を見せるよ。あわわ、うほほ、あいへーとうおー、うおー、うおー……レツゴークレイゼー！」とチュウタ氏はあわわ部分で手を口に当てたり離したりし、うほほで胸を両手で交互に叩き、戦争を憎んでから屈んで身を縮めたあと、レツゴー……のゴーの部分で飛び上がるという振りつきで叫んだ。

すると訓練機は変形を始め、膨張、チュウタ氏を飲み込み、大きくて赤い卵型の箱になつた。

（捨てるんだ……いろんなものを捨てるんだ……）とチュウタ氏はジツオにテレパシーで伝えた。

ジツオは夢とはいえ恥ずかしいなと思ったが、「はあああ！」と唸つてテンションを高め、「レツツ・ゴー・クレイジー！」と叫んだ。すると膨張はじめた訓練機に包まれ、気づくと赤い光で溢れ

る「シクピット」内の操縦席に座っていた。適度な堅さのいい感じの座り心地だとジッオは思った。

（いい発音ではなかつたが、伝わるものがあった。大事なのは気持ちだよ）と機内のスピーカーか何かからチュウタ氏の声が聞こえた。ジッオは「シクピット」内を見回したが、目の前にコントローラーと台、壁の計器類はボタン一つ以外ダミーで赤く発光しているだけ、といふ具合だつた。

壁にあるふたつのボタンのうち、右のボタンを押すとスコープが現れ、ジッオの顔にちようどいいポジション、圧力で引っ付いてきた。剥がそうとしても無理だつたので動搖したが、手探りでボタンをもう一度押すと、スコープが顔から離れた。

次に左のボタンを押すと（レツ・ゴー・クレイジー！）と高いテンションで叫ぶジッオ自身の声が聞こえた。

（心が弱つたとき、それを聞いて自分を鼓舞するんだ。きみもそのボタンを連打することになるだろつ）

「ゲームはどうすれば始まるんですか？」とジッオと聞いてみた。（ハンドルを握り、スコープあてがいボタンを押す。そしてゲームがしたいです、と念じるんだ。そうすれば始まる）ジッオはその通りにやつてみた。

ボタンを連打しろ！

三

ゲームが起動し、赤い線が画面中を暴れまわつたあと、ゆっくり治まつて映像を形作つた。黒い背景に赤い線の殺伐とした世界をジツオの戦闘機は飛んでいた。画面に（アー・ゴー・レディ？）、それから（ゴー！）と浮かび、消えた。

ジツオは言われた通り、コントローラーを握つていろいろ念じてみた。加速、旋回、上昇、下降、ミサイル、機銃。赤い線の戦闘機は思った通りの動作をした。

ふとジツオはコントローラーはほんとに飾りかな、なんて思つてしまつたので右手の右ボタンを押してしまい、ゲーム機本体のスコープが顔から離れてしまつた。もう一度同じボタンを押すとスコープが顔面にあてがつてきた。おそらく壁の計器類の横に付いていたボタンの機能があるらしい。ジツオは左のボタンだけは押すまいと誓つた。

ゲームに意識を戻すと、突然左から戦闘機が現れ、回転しながらジツオの戦闘機を追い抜き、右に急旋回して画面から消えた。

（どうだい、すごいだろ？ 山も木も街並みもまるで本物だ！）とスピーカーからチユウタ氏の声がした。

ジツオはあつ、あの赤い線は山や木や街並みなんだ、どう見ても赤い線の出来損ないだけどな、やっぱり叔父さんには普通の人と違う世界が見えているんだな、いや、夢だから叔父さんがおかしいのも無理はない、と思つた。それから、現実で叔父さんにつらくなつてしまいそうだから注意しないと、と心がけた。

「それで何をすればいいんですか？ なにか目標物を破壊するとか、敵を一定数倒すとか」

（そうだね、……そうだ！ タワーを破壊するとか！）

「え？ 思いつきではないですかね？」

（ではないよ。あれは人をたぶらかすものとも言える。いい操作の練習になるよ）

「なるほど赤い光中毒の原因つてことですか？　じゃあその目標物はどうに？」

（背の高いタワーだから！　まっすぐ飛んでればわかるよ。敵も来るし。ぼくは適当に関係ないとこ飛んで暇潰してる、じゃあね）と聞こえたあと、おそらくチュウタ氏の戦闘機が急旋回して画面を横切つていった。

言われたとおりまっすぐ飛んでいくと、赤い光の比率が高まってきた、なんだか明るいほうに進んでいくてるんだろうと思った。おそらく高層ビルと思われるものもたくさんある。

すると向こう側から戦闘機が一機飛んできて、巧みな動きで一機がジッオの後ろに回り、やや後方についてきて機銃を撃ってきた。ジッオは振り切ろうと急旋回や急上昇を試したが、まつたく無駄のない動きでついて来る。じわじわと機体のダメージが蓄積していく。ジッオはやられる前に目標物を攻撃しようと考へた。

明るいほうへ向かい続けると、背の高いタワーを発見したが、さらに背の高いタワーが少し遠くにあるのに気づいた。

「タワーふたつありますよ！　どっちを攻撃すれば？」

（近くのほうね！　遠くのほうはいいから！）とチュウタ氏の声が聞こえた。

ジッオはミサイルいけ！　と念じ、ミサイルは近くの低いほうのタワーへ向かっていった。併走していた敵機はミサイルに追走し機銃を撃つて撃ち落そうとしたが、ミサイルはタワーを直撃、赤いエフェクトが出たあとタワーは消えた。

（ヒターンしろ！　早く！）とチュウタ氏。

ジッオは言られた通りヒターンして戻るうとしたが、敵機が追走、攻撃をしかけてきた。あつけなくやられたジッオは夢中でボタンを押した。墜落していく機内のなか、レツツ・ゴー・クレイジー……とこう叫びがこだました。機体の先端が地面に突き刺さり、スロー

ブ内の画面に（ゲーム・オーバー）と赤い文字が浮かんだ。

四

そしてそのあと、リプレイと称して自分の放つたミサイルがタワーに当たったところ、それから自分の戦闘機がぼーぼーにやられるところの映像が流れた。

それから（再戦しますか？）と表示され、ジッオはむちむちやる！ と念じた。

ジッオは再戦、敗北、鼓舞ボタンの連打、リプレイ、また再戦…と繰り返したが、チュウタ氏はそのあいだいつもどこかに行つて、まったく加勢してくれなかつた。

ジッオは負け続けた怒りと悲しみで、なにがなんだかわからなくなり、ついに気を失つた。

気づくとジッオは自分の部屋のまんなかで仰向けに倒れていた。ものすくほつとしたジッオは「あー、なんだか変な夢を見ていたな」と独り言をつぶやいてみた。

「そうなの？ どんな夢？」

チュウタ氏だった。閉じられたトランクが傍らにある。ジッオは叔父さんは関わりたくないな、加勢もしてくれないし、むかつくだけだと思いつつ、電波は夢だけ！ と自分に言い聞かせた。

「んー、あれ？ どんなだつたかな、なんか変な夢を見たつてのは憶えているんですけど、内容は全然思い出せません」

「わかるよ、そういうことつてある」

「叔父さん、ぼくつて寝てました？ なんか寝たときの記憶がちょつと」

「……ジッオくんゲームしててさ、突然じゅりと寝ちゃつたんだよね。たぶん疲れてたんだろう、学校も久しぶりだつたりうし」

「ゲームしましたつけ？」

「やつ？ してなかつたかも。また今度やうつ、叔父さんの家でさ。
ぼくは近所に引っ越してきたから今日挨拶に来たんだ」

「やうだつたんですか」

「こつでも遊びに来なよ。明日の放課後だつていい

「いいですね、遊びに行きます」

「うん、でもきみ家知らないだろ？ 教えるよ」といつてチュウタ
氏は紙を取り出してわらわらりと地図を書いてジツオに渡した。

「そろそろぼくは帰るよ、じゃあね」

「あ、はい。じゃあ、さよなら」

チュウタ氏はトランクを持って部屋を出て行った。

ジツオはぼー、としながら部屋の外から聞こえる声を聞いていた。

……兄さん、ぼくは帰るよ。

えつ？ ああやうだつた。チュウタ、もう帰るのか？ ゆつくり
していけばいいのに。

じゅうぶんゆつくりせはせひつたよ。タカハセさん、長居してす
みませんでした。

「いえ、お構いもできませんで。

いえそんなことは。

またいらしてください。

そういう社交辞令が済んでしばりくあると、ドアを開け閉めする
音がした。チュウタ氏は帰つていつた。

……変だわ、わたし。チュウタさんがいるのすつかり忘れてた。

おまえもか！ オレもだ。あつ、ジツオはどうしてる？ 部屋で
寝てるのか？

「ジツオ、寝てるの？」と言つてジツオの母はジツオの部屋のドア
を開けた。

「寝てるよ」とジツオは答えた。するとジツオの母がジツオの顔を
じつと見ているので、ジツオは「え？ なに？」と若干不機嫌そう
に言つた。

「あなた、水中眼鏡でも着けてたの？ 目の周囲に跡がついてるわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8129y/>

おれたちバーチャルボーイズ！

2011年12月5日21時24分発行